

坂崎重盛

自在なる老境

そして色好みの先達・
牧野富太郎と永井荷風



縁あって、このところ、大植物学者・牧野富太郎と、作家・永井荷風の生涯を、関連著作物にあたりながら追っている。

縁あって、などと、あいまいな言い方をしたが、直接のきっかけは、牧野富太郎に関しては、この四月からNHKの『朝ドラ』『らんまん』が、牧野富太郎をテーマとしたことから、ぼく自身の牧野富太郎への思い出を含めた短い文章を書かねばならなくなったこと。また、永井荷風については昨年の六月までの二年間本誌で、荷風を理系感覚のナチュラリストとした「荷風の庭 庭の荷風」を連載、かなり補筆して、今年の

一月、書籍として上梓したことによる。

このご二人の生涯と老いは、なんとも対照的といえる。高知の裕福な商家に生まれ、ほとんど独学で植物学を極め、同時代のアカデミックからも警戒されるほどの実力をもった牧野富太郎は、その研究に没頭するあまり生活をかえりみず、生家に大きな経済的負担をかけただけでなく、自身、何度か司直から差し押さえをくらうなどの困窮生活を続け、かたや永井荷風、父は官僚から実業界に転身したエリートの家庭の長男として育ち、経済的になんの苦労も知らず、絵に描いたような放蕩息子が、アメリカ、フランスに遊び、それが契機となって、不要不急、反時代的文芸活動を専らとするランティエ（金利生活者）として生きる。

この二人、牧野は世界に名を残した植物学者、荷風もついには文化勲章を受章する文学者——、結果として聞こえはいいが、ズバリ言ってしまうえば、両者とも一生を自分の好奇心のおもむくまま、自分勝手に生きた「筋金入りの道楽者」といわざるをえない。

世間の常識、良識などとは最初から無縁で、こんな人物が家族の内や周囲にいたらたまらないだろうな、と思われる。そして、その老境がまた、それぞれ違っ

たかたちで超マイペース。へこんな生き方も、ありなんだなあ」と、もちろんにわかにも真似などできぬものの、生きるヒントと、勇気のようなものを与えてくれます。

と、いうわけで、二人の生涯のエピソードと、それぞれの老いの迎え方のありようを、思いつくままにつづってみたい。

森や林の中でも常に蝶タイ姿

まずは牧野富太郎。ぼくは、この人の名前と、そして姿を小（？）中学生のころから知っていた。なにか、



野外授業で少年たちに植物講義をする牧野先生。当然蝶タイ姿だ

そんな牧野富太郎を知ったのは、多分、そのころ月極で購読していた雑誌『子供の科学』の誌面からだったと思う。版元の誠文堂新光社という、ちょっと長い社名も、ちゃんと頭に入っていた。なぜかといえは、雑誌のバックナンバーが欲しくて、社のある場所をさがして訪ねた記憶があるからだ。記憶に誤りがなければ、誠文堂新光社は当時、一ツ橋、気象台のあった近くだった気がする。

『子供の科学』を愛読していた少年（つまり、ぼく）は、雑誌の影響があったのだろう、中学生となったところから、植物採集少年となる。小遣いを貯めたのか、親にねだったのか、植物採集をするための用具を一揃い入手、用意する。

「胴乱」「野柵」「根掘り」や、根掘りを腰に提げるための革ケース。

植物採集などに縁のない人のために、ちょっと説明すると、「胴乱」は採取した植物がすぐに枯れたり傷ついたりしないための、ブリキ製（？）の軽く、大き